
山奥の惨劇

鷲原シュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山奥の惨劇

【Nコード】

N8178T

【作者名】

鷲原シュン

【あらすじ】

服部平次と共に資産家の藤谷正蔵氏を訪ねたコナンたちところが次の日、その藤谷氏が何者かに殺害されてしまう果たして犯人はだれなのか

第一の事件

ある日のこと

博士の運転するビートルにコナン、平次、灰原、和葉が乗っていた助手席に平次が道案内のため座っているのも和葉の両端にコナンと灰原が座っている

「（はは、異色の組み合わせだな）」
苦笑いするコナンだった

もともと平次が受けた依頼主に会うために小五郎のもとを訪ねたのだが

たまたま小五郎も別の依頼主に会う予定があり仕方なく博士に頼んだというわけだ

「それで、どんな人なの？これから会いに行く資産家って？」

「ああ、藤谷正蔵言うてな、東京で財閥営んでる爺さんやそうや」

「ほんまは平次のお父ちゃん頼まれたんやけどな、事件の捜査で大阪出られへんから、かわり平次が頼まれたんや」

「魔犬の事件のときと一緒だね」

「あんときたのまれとったんは和葉のとおっちゃんやったけどな」

そう言つてため息つく平次だった

藤谷氏の別荘

「いやー、よく来てくれたね服部君」

かつぶくのいい老人が玄関で出迎えてくれた

この人が例の藤谷正蔵である

「いやーどうも、ダチも一緒やけどかまへんか？」

「かまわないよ、さ、えーっと」

「あ、うち遠山和葉言います」

「僕江戸川コナン」

「灰原哀」

「わしは東京で発明家をしている阿笠博士と言います」

「どうも、藤谷正蔵です、ささ、どうぞ中へ」

平次が藤谷さんから話を聞いてる間コナンたちがリビングで座っている

「どうぞ」

「あ、どうもありがとう」

メイドさんがお茶を運んできた

「私はここで家政婦をしている金田鈴音、よろしくね」

「あ、メイドさん、こっちにもお茶くれへん？」

「あ、はい、今持っていきます」

そう言つて彼女は和葉のほうにお茶を持っていった

「ほんで頼みたいうんは？」

「実は最近、私の身の回りで何やら不審なことをしている人物がいて、あまり疑いたくないのだが、一応調べてもらおうと思つて」

そう言つて紅茶を飲みながらくらい表情をする藤谷氏
身内を疑うのがつらいのだろう

「わかつた、俺に任せとき」

一方コナンたちは金田さんに別荘の中を案内されていた

「あそこはプール、飛び込み台もついていてなんか本格的でしょ」

金田さんの言うとおり裏庭のプールには高さ二メートルくらいの飛び込み台がある

「ここが食堂、夕飯はみんな大体ここで食べてるわ」

「やあ鈴音ちゃん、客の案内かい？」

「あー愛染さん、川田さんも一緒？」

食堂でスーツの男性ともう一人のメイドに出会った

「紹介するわね、こっちは運転手の愛染さん、そして、私と同じ家政婦の川田美智子さん」

「よろしく」

「ねえ金田さん？この別荘にいるのってこれで全員？」

「いえ、後は厨房にいるシェフの本田徹さんで全員よ」

そう言つて金田さんの向いた厨房ではガタイのいい男性が何やら料理をしていた

夕食時

平次はコナンとともに考え込んでいた

「なるほど、せやったら疑わしいんはその4人か」

「そう言えば藤谷さんの奥さんは？」

「ああ、2年前に車の事故で死んでしまったそうや、もう一人おつたメイドと一緒にな」

平次がそう呟いたのと同時に本田さんが怖い顔で彼の前に料理の皿を置いた

思わずたじろぐ平次

「ごゆっくりどうぞ」

「あ、ご丁寧にどうも」

そのまま彼は厨房へ戻つて行つた

「なんや不愛想なおっちゃんやな」

「はは」

思わず苦笑いするコナンだった

翌朝

川田さんが藤谷さんの部屋に和葉と灰原を連れてやってくる

「旦那さま、食事の用意ができました、旦那さま」

川田さんがノックするも反応がない

「へんねえ、いつもならとつくに起きてる時間なのに」

そう言つて腕時計を見る川田さん

「ねえ、あそこの窓から中の様子見れない？」

そう言つて扉の上の小窓を指さす灰原

「せやね」

和葉が持ち上げて小窓の前に灰原を持っていく
すると灰原が見たのは

「！！早く警察と救急車を呼んで！」

胸から血を流している藤谷氏の姿だった

救急隊員がすぐ到着したものの扉には鍵がかかっていて入れそうに
ない

「大変です、この部屋のかぎがどこにも……………」

「じゃあない！和葉！体当たりでこの扉ぶち壊すぞ」

「よっしゃ、せーのでいこ、せーの！」

結局平次と和葉が体当たりで扉を壊して突入した

「けど、いったい誰が旦那さまを」

愛染さんが嘆く一方、救急隊員が首を横に振って残念そうにうつむく

「そんな！」

「とりあえず現場写真とつととかな」

そう言つて平次が携帯を取り出すが

「それは俺たちにまかせな」

そう言つて入口に隻眼の男が立っていた

「きやああ！」

「だ、誰ですかあなた」

「なんや、警部さんもうついとったんか」

「け、警部？」

「そう、その人は長野県警の大和敢助警部や」

「どうも」

平次と和葉がフォローしつつ大和警部も警察手帳を開いていた
「「す、すいませんでした」」

愛染さんたちが平謝りする一方コナンは「ここ長野県だったんだ」と苦笑いするのだった

第二の事件

「被害者は藤谷正蔵、東京で財閥を営んでる実業家やそつや」

平次が大和警部に被害者のことを説明している中、上原刑事が鑑識とともに現場を調べていた

「それで、君たちはどうしてここに？」

「その爺さんに頼まれてきたんや、毛利のおっちゃんが出来へんから、代わりにこの博士の車乗せてもらつてな」

そう言つて部屋の外で待機していた阿笠博士たちを指さす平次

「で、扉を破つたのは」

「あたしと平次の二人で、なんか鍵が見当たらんみたいやから」

「それで、誰がこの状況に気付いたの？見たところあなたたちは外の雨に当たつた様子はないけど」

そう、この日は朝から雨が降つていたので

昨日は晴れていたのだが夜中に急に振り出したよう

「あれ？なんか書いてあるよ！ほら、藤谷さんの近くの床」

コナンの言つとおり藤谷さんの右手の先に血で書かれた文字が

「“鉄”？なんのこつちや」

その後、全員広間に集められた

「（あれ？金田さんがいないな、どうしたんだろう）」

確かにここに集まつた人の中に金田さんの姿がない、いったいどうしたんだろうか

「もう一人いたメイドさん……金田さんといったかな？彼女はとうしたんじゃ？」

「それが今朝から見かけないんですよ、いったいどこ行つたんだか」「それにしてもひどい雨ですね」

そう言つて愛染さんが裏庭に続くカーテンを開けると

「…………え！あれ金田さんじゃないですか？」

なんとプールの飛び込み台の上に人影が

次の瞬間その人影がプールに向かって落ちたのだ

全員がプールに駆けつけると金田さんが手首から血を流しプールに浮かんでいた

警官が何人かプールに飛び込んで遺体を地上に引き揚げる

「手首を切って死んでるな、凶器と一緒にプールに浮かんでいたこのナイフとみて間違いない、おそらく藤谷氏を刺したときのものだろう、藤谷氏の部屋の鍵も持っているようだ……………」

「自殺……………」

「ってことはまさか、金田さんが!？」

大和警部が遺体の手首を調べているとある疑問が

「いや、こいつはもしかしたら、このメイドに罪を着せるために」

「どうしてそう思うの敢……………いえ、大和警部」

「見る、この傷口」

そう言って右の手首の傷口を上原警部に見せる大和警部

「これは……………左から右へ切られている」

「そうだ、普通右の手首を切って自殺した場合、左手で凶器を持つから、傷口は右から左へと流れる、だがこいつは」

左から右へ

「つまり、誰かが右手で持ったナイフで背中越しに被害者の右の手首を切ったってことだ」

「でも、それならなぜ犯人は左の手首を切らなかったんでしょう」

「腕時計や」

愛染さんの疑問に平次が割り込んで答えた

「見てみ、その飛び込み台のそばで見つけたんや、おそらく被害者の腕時計やろな」

「犯人はたぶん左の手首を切ろうとしたときにこの腕時計に気付いたんだよ」

「とつさの犯行やったんやろうな、腕時計外したんはええけど、不自然になると思つて逆の手を切りよつたんや」

「なぜ、それが不自然なんです？」

「これから死のう思つてる人間がわざわざ腕時計なんかつけてくるわけないやろ、そこ切るんやつたら外してくるわ」

「大和警部！こんなところにロープが」

「こちらにも短いロープが2本」

部下の警部からロープを受け取り首を傾げる大和警部

「そのロープ、俺にも見せてんか？」

「ん？ああ、ほらよ」

そう言つて大和警部に見せてもらつたロープの切っ先はというと

「ん？なんや、半分だけきれいに切つてあるでこれ」

「それだけじゃねえ、金田つつーメイドの後頭部に、どこかにぶつけた跡があつたそうだ」

「ちゅうことは」

「まさか……………」

「うーん」

ほかの人たちが事情聴取を受けてる一方でコナンと平次は悩んだ様子

「あら？どうしたのかしら？」

「いや、どうしてもわからんのや、この鉄っちゅう言葉の意味」

「それにあの半分だけ切れたロープの謎」

「そしてなにより、金田さん殺害時のトリック、金田さんがプールに落ちた時みんな俺らといっしょにおつたし、周りに人影もなかった、見たんはプールの手すりくらいや」

「「うーん」」

悩んでも仕方ないので事情聴取の行われていたリビングへ向かう二人だったが

「なんや？もう終わってしもたんか？」

二人がやってきたときにはもう全員終わった様子

「そう言えばお二人さん、どうやらロープの謎が解けそうだぜ」

そんな二人に急に大和警部が話しかけてきた

「遺体の両方の手首に、ロープで縛った跡があったそうだ」

その言葉を聞いて二人は何かに気づいた

「（なるほどな）」

「（それやったらアリバイは崩れる）」

「（後は証拠と）」

「（ダイイングメッセージの意味やけど）」

そう考えながら二人が周りを見渡すと

「ん？なあ、あの写真って若いころの藤谷さんか」

「ん、ああ、そうだよ、となりにうつってるのは奥様の千代さまさ、二年前、車の事故で亡くなられて、その時運転していたメイドの百川さんも一緒に……もともと千代さまは心臓を悪くされていて、あの日も百川さんが病院に連れて行ったんだ、その帰りに車がかげから落ちて」

愛染さんが悲しげな顔をする

「そないなことより、あの写真、日本で撮ったものやないんとちゃう？」

「ええ、あの写真はお二人が出会ったドイツの音楽学校で……」

「「！？」」

その言葉で二人は又何か気付いた様子

「これでダイイングメッセージの意味もクリアやな」

「ああ、おかげで犯人もわかったぜ」

「よー考えたらあの人妙なこといっとったし、後は証拠やな」

「見つけたわ、第一の事件のあった場所だね」

相談し合ってた二人のところに灰原がやってきた

「これですべてそろったわね」

そう言つて血だらけの手袋を二人に見せる灰原だつた
それを見たコナンと平次も笑みをこぼす

解決編

「いい加減にしてくださいよ警部さん」

「確かに最初の旦那様の事件で、私たちにアリバイはありませんけど」

「2人目の金田さんの事件のとき、私たちはあなた方と一緒にいたわけですから」

「だがな、この言葉の意味がわからないことには」

そう言つて鉄と書かれた血文字の写真を見せる大和警部

「けど、鉄つて一体」

「まさか本田さん、あなたじゃないでしょうね」

「そんな、なぜ私が」

「あなたの名前は徹、読みかたをかえればてつだ」

「漢字やないで」

そう言つて平次が会話に割り込んだ

「確か愛染さんいうとつたな、旦那さんと奥さんが出会たんはドイツの音楽学校やて」

「ああ」

「ねえ、それじゃあ藤谷さんはドイツ語分かるの？」

「ああ、おそらくは」

「われわれの中にドイツ語の分かる者はいませんけど」

「旦那様や奥様はよくつかわれていたわ」

「せやったらきまりや」

「おいおい、お前らまさか犯人が」

「ああ、わかつたで」

そう言つていつの間にとつたのか鉄の文字の写真を見せる平次

「よー考えてみ、これが本田さんのことやったらわざわざ漢字で書かへんやろ」

「これはそのままの意味で読むんだよ」

「そのままの意味つつたこの中に名前に鉄が入ってるやつなんか……… 待てよ、ドイツの音楽学校」

「そうか！ドイツ語！」

大和警部と上原刑事も気づいたようだ

「ああ、皮肉にもドイツ語の鉄はあんたらの中に犯人があるつちゅうとるで」

ドイツ語で鉄は………

「EISENつまり愛染さん、あんたのことや」
アイゼン

「え？愛染さんが犯人？」

驚いて本田さんと川田さんが彼のほうを見ると青い顔をしている

「だ、だが服部君、金田さんが落ちた時私は君たちと一緒にいたじゃないか」

「あんなもん簡単な時間差トリックや、現場に落ちてたロープをつこうてな、それにあんた、なんであれが金田さんや、ってわかったん屋？」

「あんたは被害者の手首にロープを巻いて、ちょうど結び目の真ん中付近にあらかじめ切れ目を入れたんだ」

大和警部も推理に参加し始めた

「なるほど、あの飛び込み台には手すりがあったから」

「被害者の手首とそこをつなげれば次第に重さでロープが引っ張られ」

「だが、証拠は！？」

「ちゃんと証拠もあんで、ちっこい姉ちゃんが第一の現場で見つけてきたこの手袋や」

そう言っただけの手袋を見せる平次

「犯人がつけてたもんやろ」

「だが、なぜわざわざ第一の現場でそれを捨てる必要が？」

疑問をぶつける本田さん、確かに第二の事件のあったプールで捨ててもいいはずだが

「そらそうや、愛染さんはもともと、金田さんを殺す気がなかった

んやから」

「見られちゃったんでしょ、金田さんに犯行の現場を」

そう言つてより表情がこわばる愛染さん

「遺体にぶつけた跡があつたうちゅーことは、もみあいにもなつてはっ倒してしもたんやるな」

「もともと藤谷さん相手に使う予定だったトリックで彼女に罪を着せるためナイフをプールに落とした後さっきの仕掛けを準備したんだ」

「気失のうた金田さんの手首切つて殺したんやろうけど、手袋をしてへんかったんはうかつやったな」

「血はプールで洗い流せても、あれは流せないよ」

「あんたの手から出るはずや」

「ルミノール反応が」

この一言で完全に崩れ落ちた愛染さん

「2年前、あいつは！俺の妹を殺したんだ」

「それじゃああなたはあの事故のあと行方不明になつてた百川さんのお兄さん」

「ああ、妹は人一倍安全運転だった、そんなあいつが事故なんて！きつと藤谷が」

「急性虫唾炎」

そんな愛染さんの言葉をさえぎつたのはコナンだった

「知り合いの刑事さんに連絡したら、百川さんの遺体はその病気のせいで虫垂と盲腸が張り付いてたつて」

「じゃあ、妹はまさか」

「ああ、虫垂炎はごつついたいからな、運転中に発症したんやろ、それにこの病気は働き者ほどないやすいからなあ」

「ならなぜ！藤谷はそれを俺に言おうとしなかった」

「したさ、旦那様はね」

愛染さんの叫びをさえぎつたのは本田さんだった

「だが、病気のことがわかつた時君の行方はすでにわからなくなつ

ていた、旦那様は必至で君の行方を捜したが、とうとう見つけられなかったんだ」

その言葉で愛染さんの身に一気に後悔の念が押しかかり最後の金田さんとの会話が脳裏に浮かんだ

「どうしてこんなことを」

「あんたにはわからないさ」

そう言っただち去ろうとする愛染さん

「待つて、お願い、自首して、あなたはこんなことする人じゃない」「うるさい、お前に何がわかる！」

「わからないよ！でも信じたくない！あなたがこんなことする何て私は！あなたのことが！」
「うるさい！」

この時思わず愛染さんは金田さん突き飛ばしてしまう
そして彼女の後頭部からは血が

「おれは、俺は何のために………うわっあああ！」

屋敷にはただ、愛染さんの叫び声が響き渡るのだった

「悲しい事件だったわね」

「ああ、金田さんは本来、死ぬはずじゃなかったからな」

「不運にも事件を目撃してもうて、説得を試みて失敗してもうたんだよ」

「あないやさしかった人が死んでまうなんて」

愛染さんが乗せられたパトカーを見送りながら悲しい表情を浮かべるコナンたちだった

「そっか、そんなことがあったんだ」

「うん」

「ったく、いつまでお通夜になってんだよお前たち、悲しみをいつ

まで背負つててもはじまんねえ、それを乗り越えてこそ、人は大きく成長すんだからな」

小五郎の言葉でコナンや平次たちは一斉に彼のほうを向いた

「おっちゃん……たまにはええこというやないか」

「かつこええやん」

「たまにはは余計だよ……あああ！」

「なんや！？どないしたんやおっちゃん」

「くっそー外しちゃった」

そう言つて競馬新聞を破く小五郎

「まさかおっちゃん」

「競馬聞いててうちらの話聞き流しとつたんとちゃうやろな」

平次と和葉があきれ果てる中蘭のこぶしがプルプル震える

「お父さん！！」

「はいい」

驚いてたじろぐ小五郎

「（はは、台無しだぜおっちゃん）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8178t/>

山奥の惨劇

2011年10月7日22時14分発行